

2024年度

ごきげんな地域づくり人材 育成研究プロジェクト 2024年度 報告書



東京大学先端科学技術研究センター 社会包摂システム分野



ごきげんな地域
づくり人材育成
研究プロジェクト

東京大学先端科学技術研究センター 社会包摂システム分野 寄附講座

目次

I. はじめに	
巻頭言：近藤武夫	2
プロジェクトメンバー	3
II. 各事業ドメイン	
事業概要	4
1. 資質の把握と教育プログラムの開発	6
(1)「コーディネーター」の実態調査・資質の把握	6
①調査目的と概要	
②調査方法と対象	
③資質の把握	
(2)既存コンテンツの収集と分析	10
①調査目的、方法、概要	
②調査対象とコンテンツ内容の一例	
③既存コンテンツの特徴と課題	
(3)調査結果に基づくワークショップの実験的实施	11
①日本ソーシャル・イノベーション学会分科会	
②サービスデザインWSによるプロトタイピング	
③みがくSD研・コーディネーター研究会	
④パッションをかたちにするワークショップ(おためし版)	
(4)その他調査事業 - 「ごきげんな地域」の理解	15
①野村総合研究所「令和6年度 子ども・子育て推進調査研究事業 - こどもの居場所づくりに関する評価及び検証についての調査研究」	
2. 理論的枠組みの構築	16
(1). コーディネーターの分類	16
(2). ごきげんな地域づくりコーディネーターの特徴と示唆	17
3. ハブの仕組み構築 - 社会包摂システム分野の既存取組みの調査	18
III. 今後の展望	20
1. 「野性のコーディネーター」調査の継続と調査数の拡大	20
2. 研修プログラムの実施	21
(1). フィージビリティ・スタディの実施	
(2). 研修プログラム実施準備	
IV. 補論 Appendix	22
1. ごきげんな地域づくり人材育成研究の紹介ポスター	23
2. 【学会発表】第20回日本子ども学会学術集会	24
3. 【学会発表】5th Global Conference of Children and Youth	26
4. 【論文】武蔵野大学サステナビリティ研究所紀要	28
5. インタビュー調査の質問リスト	29
奥付	30

巻頭言

今、地域の課題を解決する人材の必要性は年々高まっています。

かつて中世には、地域で困り事が生じると村人が寄り合いを開き、世話役が調整役を担いました。さらに広域に及ぶ課題には惣村の代表層が動き、隣村や領主と交渉していました。そこに暮らし、課題を共有せざるを得ない人々が当事者として自治を担っていたのです。

しかし近代以降、地域の課題解決は徐々に共同体から役所へと移り、戦後の経済成長に伴う行政機能の拡大でその流れは決定的になりました。人口増加と財源拡大を背景に役所の機能は充実し、住民は意思決定に直接関わらずとも暮らせるようになりました。大規模な公共事業が可能になった一方で、自分たちの地域を自分たちで決める文化や慣行は薄れていきました。そして、少子高齢化と人口減少の時代を迎えた今、従来の仕組みは立ち行かなくなりつつあります。

民間企業もまた資本主義の効率化の中で似た変化を遂げました。かつて街々の商店街や個人商店には、店と客という関係を超えた「余白」のつながりが色濃く存在しましたが、経済的効率化の中でそうした関係は削ぎ落とされ、大規模な商業施設での企業と顧客という取引の枠内に変化していきました。共同体の一員としての企業像は、地域社会の中で少しずつ存在感を失っていきました。

それでも人が集まり暮らす限り困りごととはなくなりません。だからこそ近年、こども食堂のように人と人のつながりを紡ぎ直す動きや、新しい居場所を生み出す営みが広がっています。それは行政や資本主義的な効率化の中で失われた「余白」を取り戻す市民社会発のイノベーションであり、私たちが再び求めざるを得ない社会的必然でもあります。

かつて惣村の世話役や代表層が果たした役割を、現代では在野の「野性のコーディネーター」と呼ぶべき人々が担っています。彼らは身近な居場所をつくり、広域のネットワークを支えながら地域の課題解決に取り組んでいます。

私たちは2024年4月、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえと連携して寄付講座を立ち上げました。本報告書では、その実践研究の中で取り組んだ記録を紹介します。ここでの知見が、日本全国で進む次世代の自治とつながりを紡ぎ直す営みの一助となることを願っています。



近藤武夫

東京大学先端科学技術研究センター 教授

専門：インクルーシブ教育・雇用

障害、疾患など多様な社会背景があり、教育・学習や雇用・労働といった社会参加の機会から排除されがちな人々を包摂する社会包摂システムに関する実践と研究をしています。

プロジェクトメンバー



早川公

東京大学先端科学技術研究センター 特任准教授

専門：応用人類学・まちづくり・地域志向教育論

主にまちづくりや地域づくりの領域で、文化人類学の方法を社会課題解決に応用する方法論の研究・実践に取り組んでいます。



大野はな恵

東京大学先端科学技術研究センター 客員上級研究員

専門：文化政策・音楽教育・舞台芸術論

舞台芸術の教育普及・社会包摂の実践と研究に取り組んでいます。



渡邊陽太

東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員

専門：文化人類学・日本の子どもの貧困

日本の都市をフィールドに、子どもと貧困という視点から、社会状況や家族の在り方を研究しています。



山角直史

東京大学先端科学技術研究センター 学術専門職員

専門：社会福祉学・こども食堂

誰も取りこぼさない地域をつくるために、地域の実践者にはどんな力があるのか、調査しています。



山内泰

東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員

専門：美学・共創・社会システム

多様な組織の経営を通して、課題を生み出す社会システムの転換を促す共創プロジェクトに関わっています。

II. 各事業ドメイン

事業概要

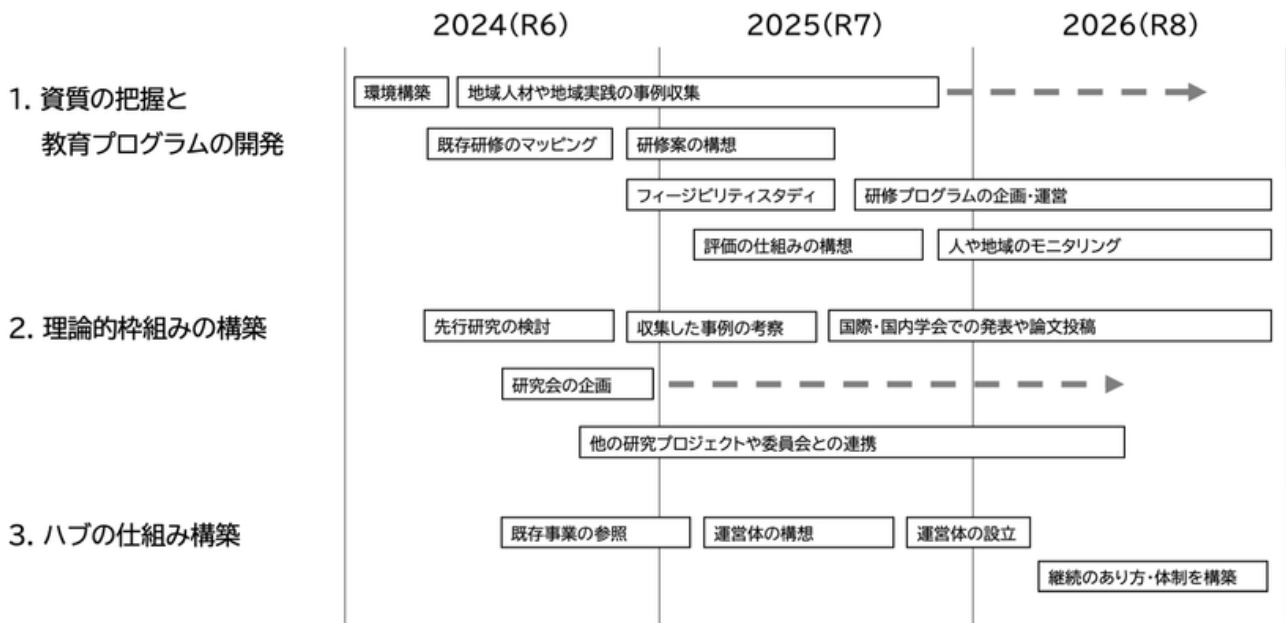


現在の日本では、貧困、子ども・若者の孤立、障害、高齢者のケアなど、社会課題が多様化・複雑化している。一方、地域では、自治会等の組織が衰退し、個人間の関係性が希薄化する中で、行政のリソースも限られている。こうした課題を解決するためには、地域を面的に捉え、利害関係の異なる複数のアクターの連携と協働を促すコーディネート人材の育成が急務である。

しかし、産学官民の縦割りを超えてパートナーシップを確立し、ともに社会課題解決のために取り組むことができる優秀なコーディネーターのコーディネート機能の再現と社会実装は困難であり、いかなる分野でも難航しているのが現状である。

本プロジェクトは、こうした課題解決に取り組むため、こどもの居場所の地域コーディネーターや分野を超えた地域での官民連携コーディネーターに求められる資質の指標開発と研修プログラムの開発、およびその社会実装を目的としている。

プロジェクトの事業とスケジュール(3年)



本プロジェクトでは、大きく分けて3つの事業を進めている。

1つ目は、「資質の把握と教育プログラムの開発」である。地域人材としてのコーディネーターや特徴的な地域実践を対象とし、主にインタビューや現場観察などの質的調査を用いて地域人材の資質の把握を試みる。合わせて、既存の人材研修プログラムを精査して特徴をマッピングし、研修プログラムを構想している。2年度目からは実際に研修プログラムを企画・運営し、地域に与えるインパクトを評価する枠組みを設計し、プログラムの効果を検証する予定である。

2つ目は、「理論的枠組みの構築」である。これまで既存の学術領域で検討されてこなかった地域人材のあり様(やその教育プログラム)を理解するための枠組みづくりを目指している。研究会を企画したり、他の研究プロジェクトと連携したりしながら、収集した人や地域の事例を考察し、国内外の学会等で発表しながら論文化を図る。

3つ目は、「ハブの仕組み構築」である。各地域での実践を通じて得られた知見を体系的に蓄積し、共有可能なナレッジとして機能させる基盤を設計し、居場所づくりに関心をもつ多様な関係者をつなぐハブとなる運営体(プラットフォーム)を立ち上げる。これにより、個別の実践が孤立することなく、知見やノウハウが横断的に共有され、新たな協働が生まれることを目指している。

1. 資質の把握と教育プログラムの開発

(1)「コーディネーター」の実態調査・資質の把握

①調査の目的と概要

2024年度は、全国で活動する「コーディネーター」の実態と資質を把握するために、調査と分析を行った。本調査は、2025年度より実施するコーディネーターの研修プログラムに応用する基礎的なデータを収集するものである。なお、本プロジェクトでは、「コーディネーター」を、(A)居場所づくりの地域コーディネーター、(B)産官学民連携コーディネーターの2種類に分類している。

②調査方法と対象

本調査では、コーディネーターとして抽出した人物に対して、複数回のインタビューまたはインタビューと行動観察を実施した。

- インタビュー

それぞれのインタビューで共通する質問項目を設け、適宜、その場で必要と判断した質問を行う半構造化インタビューを実施した。具体的なインタビュー内容は、資料5を参照されたい。

- 行動観察

コーディネーターの活動に調査者が密着する参与観察の手法を採用し、活動中の行動や発言などをフィールドノートに記録した。また調査対象者だけではなく、組織関係者や重要なパートナーも含めて観察した。

本調査の対象者の選定には、スノーボールサンプリング方式を採用し、こども食堂ネットワークに関する有識者の紹介をもとにコーディネーターを調査・分析した。主な調査対象者は、北海道、中部、九州地方で活動する3名である。その他にも、日本全国で、ワンショットのインタビュー調査を実施した。

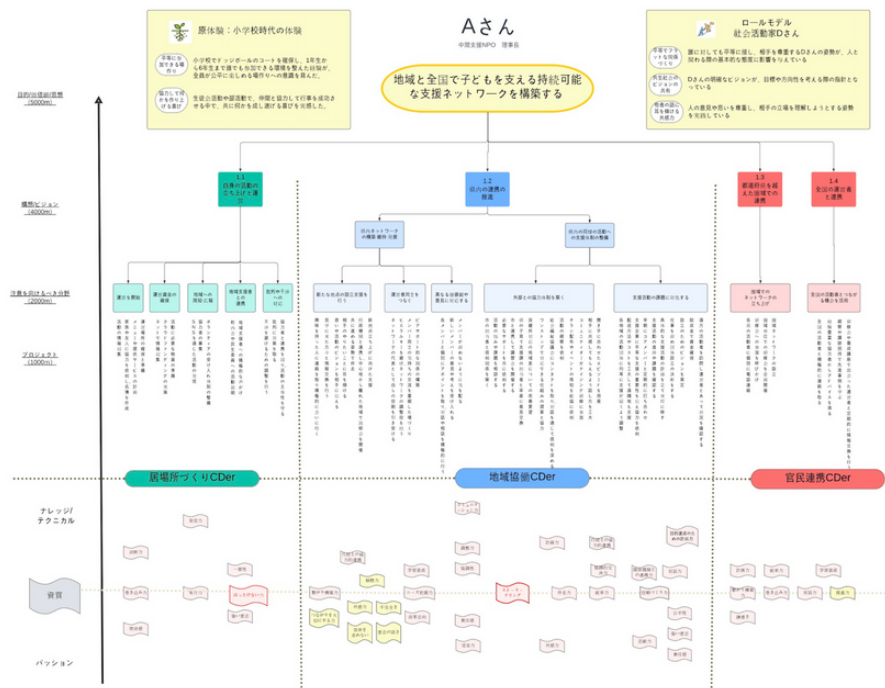
	A(北海道)	B(中部)	C(九州)
のべ日数	7日間	6日間	16日間
時間数	約56時間	約30時間	約128時間
オンライン	2回	2回	7回
組織関係者	6人	7人	5人

③資質の把握

- 資質マップの作成

インタビュー調査から、対象者の持つ「野性のコーディネーター」としての資質を抽出し、「資質マップ」に整理した。資質の上位概念として「目的」「価値観」を設定し、3つのビジョンが抽出された。次に「取組」「行動」をビジョンに基づき分類し、ツリーダイアグラム形式で階層的に整理した。下図はその一例である。

*被調査者のプライバシーに配慮し、全体像のみを示している。

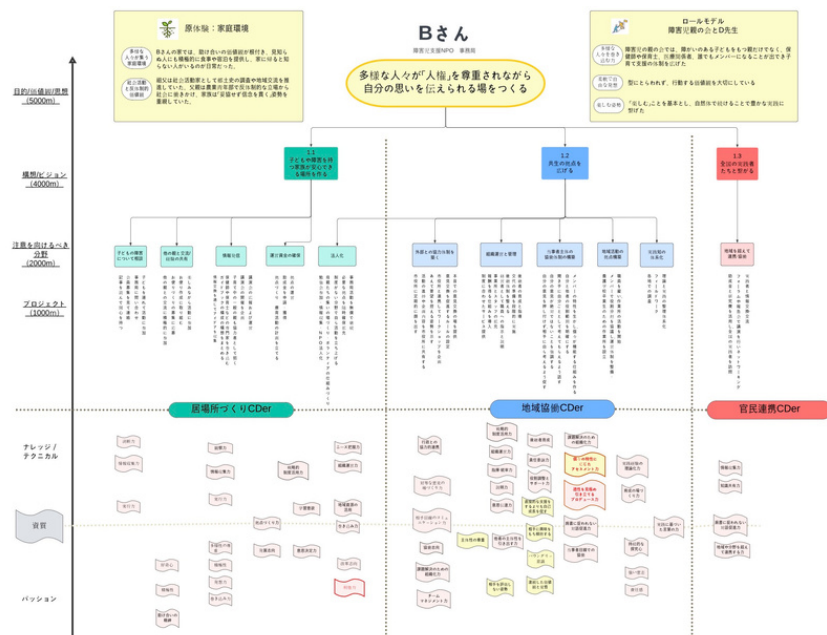


原体験とロールモデルから形成される活動の軸となる目的／価値観／思想

【横軸】
おおよそ時系列に展開する活動範囲の広がり・拡張をレイヤー化

【縦軸】
理念からブレイクダウンされる階層で整理・分類

【資質】
各プロジェクト単位で発揮される資質をタグづけ
・ナレッジ／テクニカル
・パッション



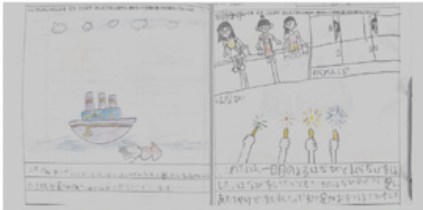
II.各事業ドメイン

- Tipsカードの作成

対象者へのインタビュー調査及び行動観察から抽出された資質を、カード形式に落とし込んだ。このカードは、研修プログラムとして実装する際に使う事を想定してTipsカードとしてストックしている。以下はその一部の例である。

ごきげんコーディネーター
Tipsカード

No.XX エピソードで会話する



Context

- 話の目線を合わせ、共通の土台をもとに対話する必要がある場面。
- 誰かについての事業が、その誰かを置いていきぼりにしないための話しあいをする。

#ビジョンの共有
#異なる価値観や意見に対応する
#半径50m/半径2km

ごきげんコーディネーターTipsカード（裏）

No.XX エピソードで会話する

Situation

- ✓ 島合同でおこなったイベント振り返りの会
- ✓ イベント中に行き違いなどもあり、どういう話の展開になるかが不明
- ✓ 打合せの最初にどんな話をするか

Detail

「今日の話し合いはどう転ぶかわからないです」と彼女は船内で、印刷資料をホチキスで綴じながら話していた。いざ振り返りの会が始まると、彼女は1枚目のアンケート結果から話すのではなく、参加した子どもたちがイベントの感想として書いた絵日記をもとにイベントでやったことを振り返った。船からイカが見えたこと、枕投げをしたり押し入れでかくれんぼしたこと、子どもたちの些細な出来事を拾いながらの話は、準備の際に生じたわだかまりを「こどものため」という視線に揃えることに成功していた。

ごきげんコーディネーター
Tipsカード

No.XX 透明人間にしない



Context

- 団体が大切にしている価値観を態度で示す
- 場にいる人すべてに関心を向ける
- 物理的なセッティングも大切にする

#多様性の尊重
#様々なメンバーと打ち合わせをする
#半径5m

ごきげんコーディネーターTipsカード（裏）

No.XX 透明人間にしない

Situation

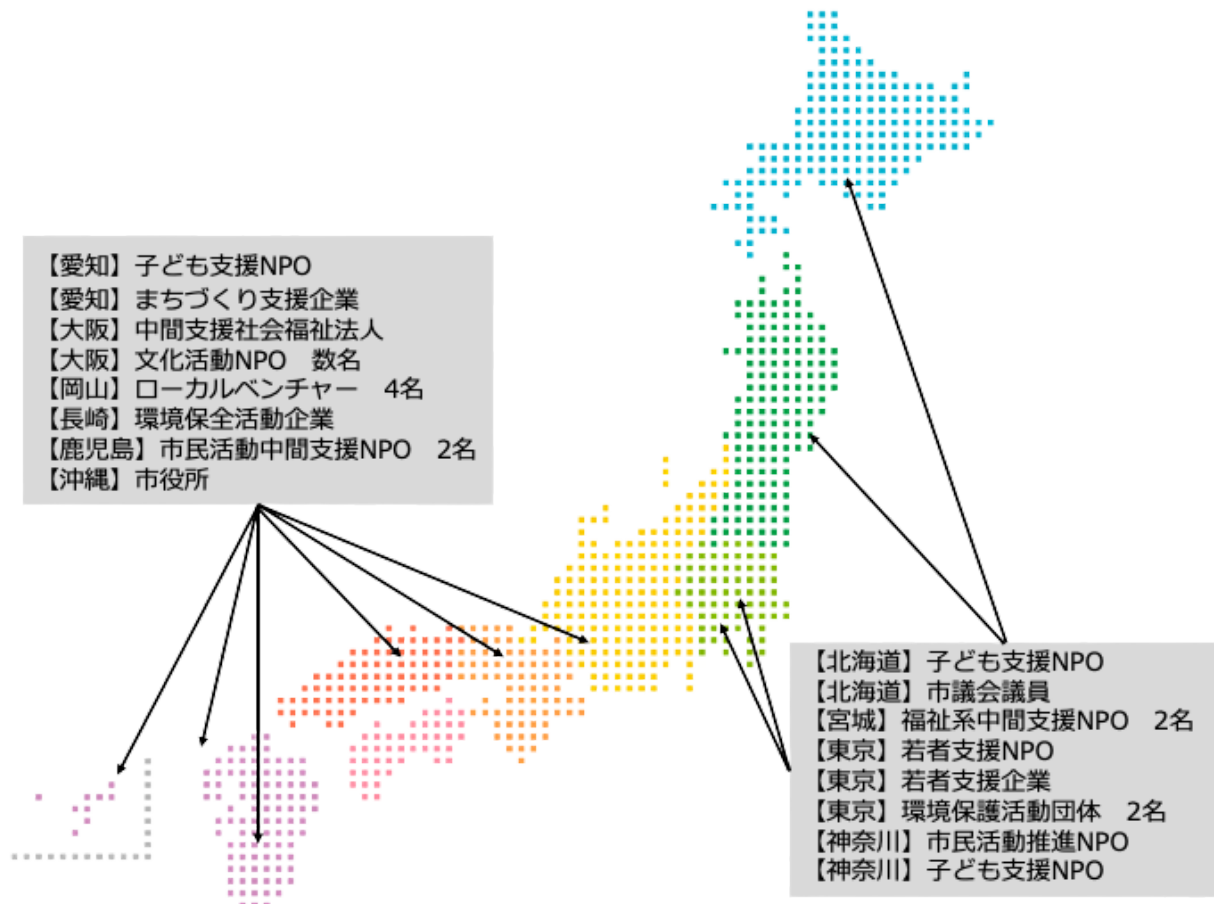
- ✓ 地域外から人を招いた研究会
- ✓ 参加者で机の輪ができています
- ✓ 障害をもった関係者の娘が病院から帰宅

Detail

車椅子に乗った関係者の娘は、輪の外に位置を決めて止まった。するとかれは立ち上がり、自分の机を横に数十センチ右へ移動させた。そうすることで、彼女はその位置からスクリーンを妨げられずに見られるようになった。

- その他の地域へのワンショットの聞き取り

前述の3名の他に、以下の調査協力者への単発のインタビューを実施した。単発のインタビューは、主な調査対象者を選出するために必要であったことに加え、下記のマップの通り、コーディネーターに関する課題の地域差を理解するために重要なものとなった。



(2)既存コンテンツの収集と分析

①調査目的、方法、概要

研修プログラムの企画にあたり、コーディネート人材育成にかかわる既存コンテンツを収集し、運営母体へのヒアリングと実際の体験を通して、既存コンテンツの特徴と課題を調査した。

②調査対象とコンテンツ内容の一例

- ・コミュニティ・ツールボックス(カンザス大学)
- ・安寧社会共創イニシアチブ(京都大学・千葉大学)
- ・「EJ ART」人材育成プログラム(大阪公立大学)
- ・コーディネーター研修(子ども文化地域コーディネーター協会)
- ・共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点(東京藝術大学)
- ・インクルーシブ・リーダーズ・カレッジ(筑波大学)
- ・コミュニティ・ビジネスガイドブック(NPO法人起業支援ネット)
- ・生活支援コーディネーター養成講座(特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター)
- ・準認定ファンドレイザー必修研修(日本ファンドレイジング協会)
- ・松原明・大社充 著『協力のテクノロジーー関係者の相利をはかるマネジメント』学芸出版社
- ・ボランティア・コーディネーション力3級検定(特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会)
- ・伴走型支援基礎講座(日本伴走型支援協会・日本福祉大学)
- ・コミュニティ・オーガナイズ(コミュニティ・オーガナイズ・ジャパン)
- ・ライフデザイン・ポートフォリオ(Safeology研究所)

* 下線はヒアリングしたもの、**太字**は実際に体験したもの

③既存コンテンツの特徴と課題

上記のコンテンツは、それぞれの領域で求められるコーディネート人材を育成する上で優れた効果を発揮する一方で、分野や領域を越えた実践を行うための体系的な教育を行うまでには至っていなかった。

本プロジェクトは、既存コンテンツの蓄積を踏まえた上で、上記の課題に応えるものである。

(3) 調査結果に基づくワークショップの実験的实施

2024年度は、調査に基づき、フィージビリティ・スタディに向けたプロトタイピング(試作・試行)を実施した。

①日本ソーシャル・イノベーション学会分科会



- ・ 協働パートナー:みがくSD研(未来の学びと持続可能な開発・発展研究会)
- ・ 開催日時:2024.09.16(月)
- ・ 開催場所:早稲田大学西早稲田キャンパス
- ・ 概要:

日本ソーシャル・イノベーション学会の分科会セッションにて、早川と大野がワークショップ「人間の「態」としてのコーディネーターを考える」を実施し、約30名の方に参加いただいた。

ワークショップでは、これまでの調査から抽出したコーディネーターの資質を紹介し、カード化した資質を組み合わせ、コーディネーターにどんな資質が必要か、その資質を地域で発揮するためには何が必要かをグループごとに対話した。

ワークショップでは、社会課題に対して「動かすにはいけない」や、コーディネーターを「ほっとけない／世話を焼きたくなる」といったあり様が報告された。

こうした資質はこれまでの教育ではアプローチされてこなかったものであり、今後、研修プログラムとしてどう企画していくかについて示唆を得ることができた。

②サービスデザインWSによるプロトタイピング



- 開催日時:2025.02.05(水)
- 開催場所:東京大学駒場Ⅱキャンパス
- 概要:

研修プログラムの実施に向けて、調査結果に基づいてコーディネーターの資質を抽出したTipsカードを作成し、それを用いた演劇的ワークショップを試行した。またTipsカードを活用したワークとして、「こども食堂開催へのクレーム」等を想定したケースワークをサービスデザインの枠組みを援用したカードゲーム形式でプロトタイピングしながら検討した。

具体的にTipsカードを作成して使用することで、ワークを効果的に進めるための課題やテーマ選び、タイムスケジュールの設定、グループワークのやり方、参加者がつまづきそうなポイントなど、実際の運用に必要な要素を検証することができた。

③みがくSD研・コーディネーター研究会 ー「パッション」を立ち上げるためのワークショップ



- ・ 共同開催：みがくSD研（未来の学びと持続可能な開発・発展研究会）
- ・ 開催日時：2025.02.11（火）
- ・ 開催場所：東京大学駒場Ⅱキャンパス
- ・ 概要：

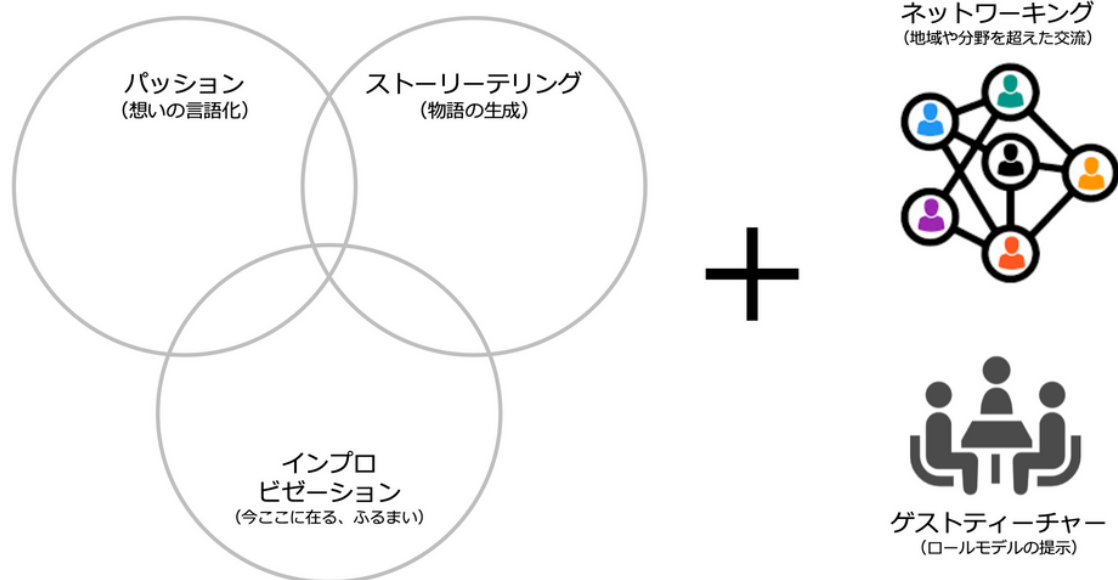
本ワークショップでは、現在、当プロジェクトが開発している地域コーディネーターの資質・人間性を引き出す研修プログラムの1つとして、他者と協働し、活動を前に進める原動力となるパッション（想い）を立ち上がらせるための方法を試行した。

ゲスト講師には、山川修氏（Safeology 研究所代表/福井県立大学名誉教授）を招き、山川氏の研究テーマと開発したライフデザイン・ポートフォリオについてレクチャーいただいた後、実際に参加者とワークシートを元にそれぞれのライフデザイン・ポートフォリオを作成するワークショップを実施した。

④ パッションをかたちにするワークショップ（おためし版）

教育・研修プログラムの構成図（案）

1-c. プログラムコンテンツまとめ



- ・ 開催日時: 2025.03.11(火)
- ・ 開催場所: オンライン
- ・ 概要:

研修プログラムの実施に向けて、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえから参加者を募り、ライフデザイン・ポートフォリオのワークをオンラインで実施した。本ワークショップを実施するにあたり、参加者にプロジェクトと研修プログラムの概要、本ワークの位置付けを共有することで、より効果的に検証できるよう試みた。また終盤では、4人1組でグループを組み、ワークを通じて感じたことをリフレクションしてもらった。

実際の研修プログラムを想定することにより、オンラインでの運用形態、方法、課題点を明確にすることができた。

(4) その他の調査事業－「ごきげんな地域」の理解

その他、調査事業の一環として、以下の委員会に早川公特任准教授が参画した。

野村総合研究所

「令和6年度 子ども・子育て推進調査研究事業－こどもの居場所づくりに関する評価及び検証についての調査研究」

振り返りのポイントの全体像		
カテゴリー	振り返りのポイント	
	「みんなでやろう」	「できるといいね」
こどもを大切に、尊重する居場所であるか (こどもの権利を知り、生かしているか)	こどもを大切に、尊重することの重要性を理解しているか	- スタッフが、こどもの権利について学ぶ機会を設けているか - こどもが自分の意見や違和感について声をあげやすい環境になっているか
こどもにとって安全・安心な居場所であるか	- こどものからだところの安全・安心が守られているか - こどものプライバシーが守られているか	- 居場所を運営するに当たっての理念や担い手の行動規範を言語化・共有しているか - こどもを取り巻く環境に目を配り、環境変化に対応した運営を行っているか
多様なこどもがいることを理解し、受け入れているか	- 多様なこどもがいることを理解しているか - 居場所に来ているこどもの個性や特性、ニーズに配慮した居場所づくりを行っているか	こどもたちの背景に配慮し、つながりやすい居場所になっているか
こどもの意見を聞き、こどもにとって魅力的な居場所をつくっているか	こどもの意見を聞き、こどもと一緒に魅力的な居場所を作っているか	- こどもが気持ちや意見を表明しやすい環境になっているか - こどもが居場所と思えるような居場所づくりになっているかを振り返り、改善できているか
地域に開かれ、多様な関係者と協力して居場所を作っているか	- 地域のサポートを活用しながら居場所づくりをしているか - 地域と連携して居場所の情報をこどもに届けているか	- こどものために何か活動したいと思っている地域の人々を巻き込んでいるか - 地域の様々な居場所と協力しているか - 環境が変化してもこどもが居場所を失わないようになっているか

本調査研究は、地域のつながりの希薄化、少子化の進展等の社会構造や経済構造の変化により、こども・若者が居場所を持つことが難しくなっている状況に対して、こどもの居場所づくりの実践を検証することを目的としている。

具体的には、こどもの居場所づくりを、「固有の居場所での活動」と「地域全体での活動」に分け、それぞれ検証した。その際に、「固有の居場所での活動」では、居場所づくりの活動を測るための指標として、「自己点検ツール」を作成した。また「地域全体での活動」では、自治体等が居場所づくりの施策を計画・評価する際の指標として、「中間目標・成果指標」を作成した。これらに基づき、世田谷区、杉並区、社会福祉法人堺市社会福祉協議会、徳島県を対象に、ヒアリング調査を実施した。

当プロジェクトからは早川公特任准教授が委員の1人として関わり、調査プロジェクトに関する助言や提案を行った。今後は、作成された指標を「使える」ものにしていくために広報や研究会にも関わる予定である。

2. 理論的枠組みの構築

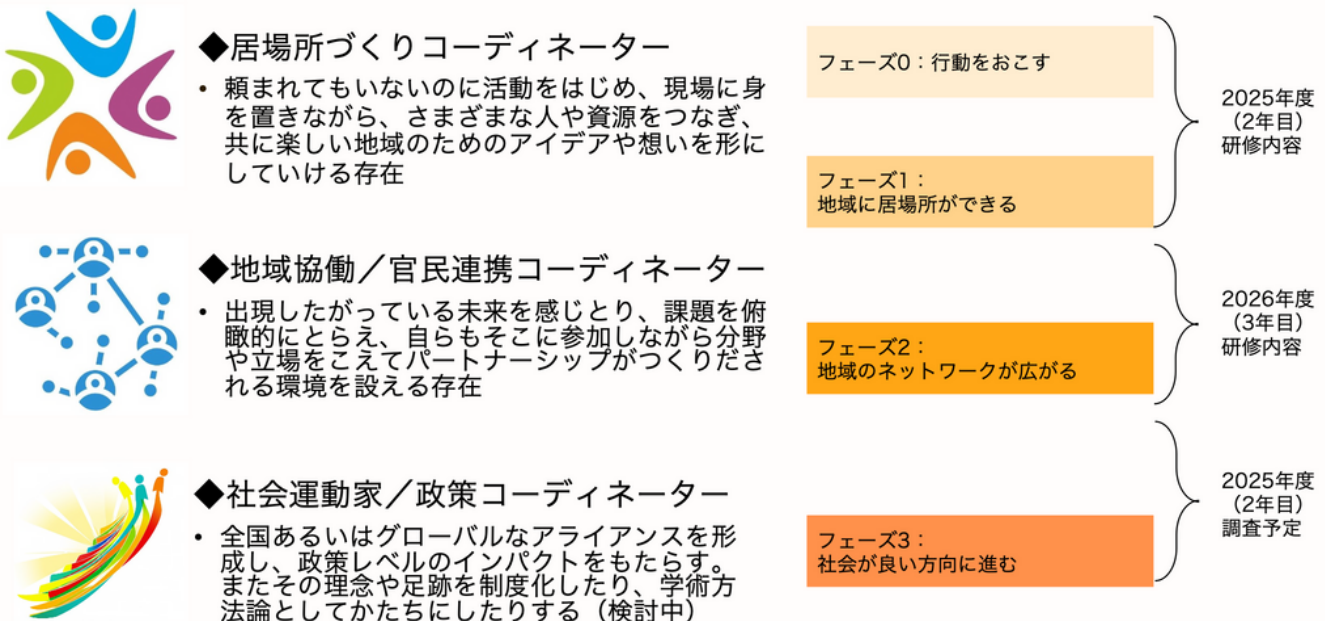
各地でのコーディネーター調査で得られた成果をもとに、コーディネーターとはいかなる存在なのかを理論的に検討した。

(1) コーディネーターの分類

2024年度調査では、コーディネーターを(A)、(B)という2種類に分類したが、その後の調査と分析から、3種類目の(C)社会運動家／政策コーディネーターも存在する可能性が示唆された。したがって、2025年度の調査では、(C)タイプのコーディネーターに関する調査・分析を実施し、仮説を検証していく。

また調査からは、コーディネーターは、以下の0から3のフェーズに沿って、影響を与える範囲を拡大している可能性が導かれた。

調査からの知見：ごきげんな地域づくり人材の3タイプ



(2) ごきげんな地域づくりコーディネーターの特徴と示唆

主要な調査を行った3名のコーディネーターへのインタビューと行動観察からは、以下のような共通点が見られた。

①完全無欠のリーダーではない

3名のコーディネーターは、いずれも「完璧な」リーダーというよりは、できないことを周囲に頼りながら事業を進めていく、関係性の中でリーダーシップを発揮していた。3名の傍には「風神と雷神」のようなパートナーがおり、コーディネーターがリーダーシップを発揮するためのサポートをしていた。関係的でコレクティブな「リーダーシップ」は、今後のトレーニングを考えるうえでも重要である。

②活動のルーツとなる原体験をもつ

3名のコーディネーターからは、活動のルーツとなる原体験が語られた。それは社会活動家の家族や、3歳のときから一人でバスに乗っていた自身を支えてくれた地域の人たちの存在、自身を揺るがすような子どもの貧困に関する事件であった。またそれらの原体験を一つのストーリーとして語り、周囲の人々を動かしていくことも共通して見られた。ここからの示唆として、前未来形(未来に向けて過去を語り直す)的なトレーニングが効果的な可能性が示された。

③「ロールモデル」の存在

3名には、活動の方針を見定める際の「北極星」になるようなロールモデルがいることも共通している。例えば、講演会で出会った社会活動家、母親会の運営者、事業の学校で出会った師匠などである。

④活動の理念や大切にしていることを言葉に託せる

3名のコーディネーターたちは、「こどもをまんなか」、「生活当事者」、「本人中心性」といった活動の理念や大切にしていることを言語化し、自らの経験を情感とともに相手に伝えることができるという特徴がある。そのため、言語運用に関する省察的なトレーニングを研修に組み込む意義は大きい。

⑤中動態的な振る舞い

3名の言葉には、「社会を変える」、「課題を解決する」というよりも、「自然と助けが集まる」、「解決される」といった中動態的な表現が多く見られる。それは関係性の中で発揮されるリーダーシップをはじめ、3名のコーディネーターに共通する中動態的な振る舞いから生じている。

＊中動態とは、哲学者國分功一郎の『中動態の世界』で広く知られるようになった概念。「能動(する)／受動(される)」という枠組みではなく、自分たちを場として出来事が生成され、そこに自身が巻き込まれるあり方に注目する。

3. ハブの仕組み構築

社会包摂システム分野の既存取り組みの調査

本プロジェクトが所属する東京大学先端科学技術研究センター社会包摂システム分野（近藤武夫研究室）では、障害、疾患、引きこもり、高齢など、地域社会での教育・雇用等の機会から排除されやすい人々の社会的包摂にかかわるアクションリサーチを行ってきた。

本プロジェクトは、社会包摂システム分野の先行プロジェクト【参考】と社会課題に関する背景を共有し、これまでの成果と知見を基盤として、社会実装に向けた検討を進めている。

具体的には、社会包摂システム分野で既に研修プログラムを展開している「PHED」の取組を参照した。「障害学生支援スタンダード集」に基づく学内体制整備やコーディネーター育成の経験からは、研修プログラムの理念的基盤となる＜原則＞の構築を参照し、また、集中的な人材育成を実現するグループスーパービジョンの実践からは、研修およびコホート形成の仕組みを参照した。

先行プロジェクトと本プロジェクトはいずれも、社会的排除にかかわる地域課題の解決を目指すという点で問題意識を共有している。特に、先行プロジェクトの社会実装段階においては、分野横断的に地域課題に取り組むことのできるコーディネーターの存在が重要であることが示されていた。本プロジェクトは、こうした課題に応答し、先行プロジェクトの成果を発展させるものであり、社会包摂システム分野内での相互作用と知見の深化が期待される。

【参考】社会包摂システム分野の先行プロジェクト

■DO-IT Japan

産学連携により、テクノロジー活用により大学進学や雇用・キャリア移行を長期的に支援することで、障害のある子どもたち（小学校3年生～中学生）、若者たち（高校生・大学生）の中からリーダー人材を育成するプロジェクト。

■AccessReading

障害等があり文字を読むことが難しい児童生徒のためのオンライン図書館のプロジェクト。障害や疾患により通常の教科書を扱うことが難しい小中高校生向けに、アクセシブルなデジタル図書に変換した教科書（音声教材）および図書（読書感想文の課題図書）等を配信し、学校等での利活用を支援。

■IDEA

通常の障害者雇用から排除されやすい特性のある人々を雇用に接続する地域の仕組みを作るプロジェクト。週15分や1時間からでも一般企業で役割を持って働き、地域がそれを支える「超短時間雇用モデル」を開発・社会実装。

■AEMC

点字教科書、拡大教科書、音声教材など、アクセシブルな教科書を制作する全国の団体と、教科書出版社の間に立ったサポートのため、製作の基礎となるデジタルデータを配信するインフラ構築を行い、両者をサポートする中間支援を実施。

■PHED

高等教育段階での障害のある学生の支援について、全国の大学や企業と連携し支援スタンダードを構築・公開したり、専門研修等を開発したり、キャリア移行やインターンシップについて全国各地で産学官連携による拠点づくりを支える取り組み(タウンミーティング)等を行うプラットフォーム構築プロジェクト。

■IDIS

「アジア環太平洋・障害と雇用・キャリアのインクルージョンに関する国際シンポジウム(International Disability Inclusion Symposium, 略称IDIS)」を開催。障害のある大学生の修学を支援し、将来のキャリアへの移行を支える取り組みについて、知識や経験を広く共有。

■CORBIE

読書や知識へのアクセスに関わるインクルージョンをテーマとしたプロジェクト。「学校図書館等における読書バリアフリーコンソーシアム」を運営し、多様な障害のある子どもたちの「読書」を支える全国のグッドプラクティスの収集、アクセシブルな書籍・資料の共有に関する著作権法の知識の周知等を実施。

Ⅲ. 今後の展望

1. 「野性のコーディネーター」調査の継続と調査数の拡大

2024年度の調査研究は、前述したコーディネーターのフェーズで言えば、0から1の段階について分析することができた。2025年度では、1から2、2から3のフェーズにおけるコーディネーターの資質や在り方について調査を進める予定である。

また、2024年度は主に西日本で活動するコーディネーターを中心に調査を行ったため、2025年度は、東日本にも調査を広げていく方針である。

以上の調査結果をもとに、2025年11月より、実際にコーディネーターを養成する研修プログラムを実施し、研究成果の還元と社会実装を試みる。

（2025年度、前期の調査実施状況＋後期の予定）

フェーズ2以降で重要となる資質として、2024年度の調査と分析からは、地域間ネットワークの形成、団体やネットワークの財源コーディネートが必要であることが示唆された。

2025年度は、フェーズ2以降に着手しているコーディネーターとして、関東地方、東北地方、四国地方をフィールドに複数名を選び、調査を行う予定である。

より具体的には、こども食堂のネットワーク団体の事務局担当者、広域で子どもの貧困等支援を提供するNPO法人の代表、個人を起点に組織内外でネットワークを形成して日々の活動に還元する実践者を対象に、インタビュー調査を実施する。

調査項目

- 行政、福祉機関、学校、地域コミュニティとのネットワーク形成
- ネットワーク団体立ち上げのプロセス
- 一つの団体の事業拡大におけるネットワークの構築
- 個人を起点とした組織内外でのネットワーク形成と還元
- 上記の達成に寄与しているコーディネーターの資質

そのほか、新たな地域に調査を拡大するとともに、フェーズ2および3に関わるコーディネーターの調査と理論化を進めていく方針である。

2. 研修プログラムの実施

(1) フィージビリティ・スタディの実施

川崎市教育委員会と連携し、地域教育会議・地域教育コーディネーターを対象としたワークショップを開催予定。特定の養成過程を経たわけではない、「野性のコーディネーター」である活動者に対してフィージビリティ・スタディを実施することで、研修プログラムに対するフィードバックが得られることを期待する。

日程：2025年6月17日、7月8日、8月1日18:30～20:30

場所：高津市民館 視聴覚室

プログラム：①「種火」をみつける ②「哲学」をつくる ③「ふるまい」を演じる

社会包摂システム分野のプロジェクトに関わる地域コーディネーターを対象に、1泊2日のワークショップを開催予定。11月の研修プログラムのプロトタイプを実施し、全体と細部へのフィードバックを受ける。

日程：7月下旬

場所：東京大学駒場Ⅱキャンパス(予定)

プログラム：フェーズ0とフェーズ1に関する対面型の集中的ワークショップ

(2) 研修プログラム実施準備

調査で得られた成果をもとに、コーディネーターを養成する研修プログラムを構築する。全国各地で地域の居場所づくりに関わる活動をしている／したい人を対象に、地域や分野を超えて活動できるコーディネーターを養成することを目的とする。今後、研修を受けた参加者が各地でさらなるコーディネーターを育てることができるよう持続的な仕組みとなることも期待される。

内容：ライフデザイン・ポートフォリオ、ストーリーテリング、演劇インプロビゼーション等のワークを通して、コーディネーターに必要な資質を身につけるとともに、構造的な不平等や他者と関わるフェアネスなあり方を学ぶ。

オンラインセッションと対面スクーリング(予定)

日時：11月頃

場所：東京大学駒場Ⅱキャンパス

IV. 補論 Appendix

1. ごきげんな地域づくり人材育成研究の紹介ポスター

2. 【学会発表】(ポスター発表)

大野はな恵・早川公・近藤武夫「地域社会におけるこども食堂の発展—実践者の役割とコミュニケーションの視点から—」第20回日本子ども学会学術集会、2024年9月。

3. 【学会発表】(ポスター発表)

Hanae Ono, Ko Hayakawa, Takeo Kondo. From grassroots to policy: Kodomo Shokudo(Children's Cafeterias) in Japan as an inclusive place for everyone. 5th Global Conference of Children and Youth, 2025年3月.

4. 【論文】

早川公・大野はな恵・近藤武夫「ごきげんな地域づくりに向けた人間の「態」についての試論—地域社会における「コーディネーター」をめぐる展開と今後の展望—」武蔵野大学サステナビリティ研究所紀要、2巻、pp.107-118、2025年。

5. インタビュー調査の質問リスト

1. ごきげんな地域づくり人材育成研究の紹介ポスター



◆ごきげんな地域にいる2タイプの“コーディネーター”とは？

(A) 居場所づくりの地域コーディネーター



頼まれてもいないのに活動をはじめ、現場に身を置きながら、さまざまな人や資源をつなぎ、共に楽しい地域のためのアイデアや想いを形にしていける存在

(B) 産官学民連携コーディネーター



出現したがっている未来を感じとり、課題を俯瞰的にとらえ、自らもそこに参加しながら分野や立場をこえてパートナーシップが作りだされる環境をととのえる存在

◆研究と社会実装のミッション

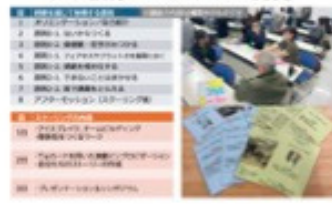
I. “コーディネーター”の実態把握と実証研究



☆“コーディネーター”とはどんな存在なのか
求められる資質とは何かを明らかにし、
応用可能な知見を抽出する

- 【対象・方法】
- ✓ 制度化されたコーディネーターだけでなく人間としてのあり様に注目する
 - ✓ 専門知識・技能・態度の三要素から検討する
 - 特に“態度”のような言語化されていない知能について実証的知見をもとに分析する
 - ✓ 既存の枠組みを超えて活動する人を対象とする
 - 働くことも含め、地域の居場所づくりを支えるなど
 - ✓ 国内外の事例収集とインタビュー／参加観察を実施する
 - ✓ コーディネーターが活躍する地域環境（制度・労働など）にも注目する

II. 地域の“コーディネーター”を育成する教育プログラムの開発



☆抽出した資質を踏襲する教育プログラムを開発・実施し、
効果検証・改善を行う

- 【教育プログラム設計】
- ✓ 既存の人材育成プログラムでなされていない領域に着目
 - ✓ 地域人材として活動している／活動を広げたいと考えている方を対象とする
 - ✓ オンラインとスクーリングの研修（約4ヶ月間）
 - ライフデザインサポートフォリオ、ストーリーテリング、演劇インプロビゼーションなど
 - ✓ コーディネーターに必要な資質として整理した“原則”を対話的なワークを通して学ぶ
 - ✓ プログラム後の効果検証を実施する
 - ✓ 幅広い学びを支え合うコミュニティづくりにつなげる

III. 地域人材を継続的に生み出すプラットフォームの構築



☆地域の居場所づくり事業のハブ化や
アジア圏の居場所づくりの拠点を目指す

- 【これからの展望】
- ✓ 国内には、それぞれの領域で特徴的な活動を展開する主体が存在するが、それらが機動的・創発的に協働する場が必要とされている
 - ✓ 本プロジェクトは、さまざまな分野の主体をつなげるハブとしての機能を出すことも構想している
 - ✓ 教育プログラムの修了生が地域でコーディネーターとして活躍し、各地で新たなコーディネーターを育てることで、実践的な知見を蓄積する
 - ✓ 日本と同じ状況にある他のアジア諸国とも課題を共有し、アジア圏における居場所づくりの拠点としての役割も視野に

〈プロジェクト・メンバー〉

近藤武夫

障害、疾病など多様な社会背景があり、教育・学習や雇用・労働といった社会参加の機会が排除されがちな人々を包摂する「社会包摂システム」に関する実践・研究

早川公

応用人間学、まちづくり論、地域志向教育論。公共領域の課題に文化人類学の方法を適用して解決する方途や地域での教育プログラムを考案

渡邊陽太

文化人類学、子どもの福祉、家族、日本と東アジア。子どもと貧困という視点から、社会状況や家族がどのように変えられるかを研究

山角直史

誰も取りこぼさない地域をつくるためには何が必要なのか。そしてそんな地域をつくる人々はどうな力を持っているのか。地域の美意識から学ぶ

2024年9月21～22日、青森県八戸市 認定こども園八戸文化幼稚園
「地域社会における子ども食堂の発展—実践者の役割とコミュニケーションの視点から—」

発表者：大野はな恵、早川公、近藤武夫

成果：

子ども学会における質疑応答や参加者との対話を通じて、以下のような知見が得られた。

まず、本研究に対して「極めて優れた個人の事例であるが、他地域への展開可能性や、汎用的な研修プログラムとしての転用が可能か」といった問いが複数寄せられた。参加者との対話を通じて、特定の実践者が有する資質をいかに抽出・構造化し、一般化可能な形で育成プログラムへと展開しうるかが、今後の研究における重要な検討課題であることが改めて確認された。

また、「他の実践者との比較において、当事例はどのような特徴や差異が見られるのか」といった視点からの質問もあった。現在の段階ではA氏の事例に基づいた分析に留まっていることから、今後は複数の実践者を対象とした調査を蓄積し、地域・制度・個人背景の多様性を踏まえた資質形成プロセスの類型化や、共通する資質の抽出を進める必要性が示唆された。

3.【学会発表】5th Global Conference of Children and Youth

From Grassroots to Policy

Kodomo-Shokudo in Japan as an Inclusive Place for Everyone

(Children's Cafeteria)

Hanae Ono/ Ko Hayakawa/ Takeo Kondo (The University of Tokyo)

Social Background in Japan



① Low birthrate and aging society

- Birthrate: 1.36 (2000) → **1.20** (2023)
- Basic Act on Countermeasures for a Society with a Declining Birthrate (2003)
- Inadequate support for families



② Children and youth development

- School refusal, bullying, NEET, and social withdrawal
- Child abuse and neglect
- Act on Promotion of Child and Youth Support (2009)
- Increase of relative poverty: **15.4%** (11.2% for children)
- This percentage is high by international comparison



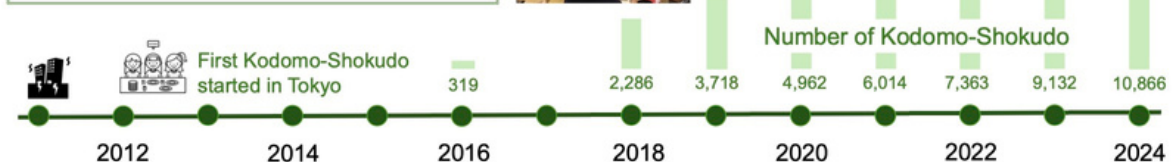
③ Society with weakened social ties

- Dilution of communities and self governing-activities
- Pointing out the "disconnected society" (2010)
- Circulation of self-responsibility discourse
- Consumerized society
- Need to counter social isolation

Kodomo-Shokudo and the Role of Coordinators

What's Kodomo-Shokudo ?

- Activities that provide children with a place to **eat and enjoy a meal** for a fixed price or free of charge.
- Many of them are open not only to children but also to their parents, the elderly, and other local residents.



Rise of the movement Mass media spotlight



National Caravan Tour for Kodomo-Shokudo (2016-18)



Musubie: Kodomo-Shokudo Nationwide Intermediary Non-Profit Organization (2019)

こども家庭庁
The Children and Families Agency (2023)

Policy shift



Act on the Promotion of Policy on Child Poverty (2014)

Cross-Party for Child Poverty (2016)



General Principles of Policy on Child Poverty (2019)



The Basic Act on Children's Policy (2022)

Needs of "coordinator" for developing inclusive places



(A) Local coordinator for community manager



(B) Coordinator for promoting public-private alliance

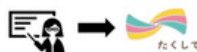
Case Study: An Activist's Initiative

This study examines the development of from grassroots to policy based on a typical person and her activities as a case study.

Research Methodology
Semi-structured Interviews
-Conducted with the practitioner and two support members
-Total about 12 hours (5 times)
Participant Observations
-A survey period of approximately 16 days, from April to December in 2024



Aimi Sonoda
- Born in Kagoshima
- Has 3 children
- Former primary school teacher
- Now representative of NPO



[2016~]
- Knew about the Kodomo-Shokudo through a magazine
- Launched the first Kodomo-Shokudo in Kagoshima
- Persistent negotiations with neighborhood associations and community members
- Continues in twice a month

[2017~2019]
- Participated in National Caravan Tour in Kagoshima (2017)
- Established Network Association in Kagoshima
- Knotting Kyusyu-Okinawa Network (2018)
- Kagoshima Pref. has budgeted support for Kodomo-Shokudo (2019)

[2020~2024]
- Increase Kodomo-Shokudo (62 locations) in COVID-19 Pandemic (2020)
- Quit teacher and started up an intermediate non-profit organization (2021-22)
- Adopted for Dormant Deposit Fund
- Develop Private-Partner alliance in and Around the prefecture

Challenges and Future Directions

- ① Why did Kodomo-Shokudo spread from grassroots to policy?
- ② What's key qualities for "Coordinator" ?

- ① Kodomo-Shokudo for a place easy to get involved with activities
 - Many Japanese who have no religious background and are reluctant to engage in social activities.
 - Preparing meals, cleaning rooms, and playing with children...are opportunities for involvement.
 - Co-eating is Co-designing of our own lives.

- ② "Altruistic leadership" and "Response-ability"
 - It is similar to servant leadership, but more fundamentally she is not hierarchy-oriented. *Hottokenai* (meaning an Agency eliciting help from others) is valued by people around her for her altruistic behaviour.
 - *Ou-tou* (Response-ability) is an expression of her behavior towards her surroundings. She is doctoring (cf. Moi 2008) with people and places.

2025年3月27～29日、イギリス・オックスフォード大学(ウースターカレッジ)
“From Grassroots to Policy: Kodomo Shokudo (Children’s Cafeteria) in Japan as an Inclusive Place for Everyone”
(「草の根から政策へ—すべての人々にとってインクルーシブな場所としてのこども食堂」)

発表者：早川公、大野はな恵、近藤武夫

日本語要約：

この研究は、日本における「こども食堂」の発展と拡大について考察し、子どもや若者の福祉を支援する世界的な取り組みと関連づけながら「こども食堂」の役割について分析したものである。こども食堂は、こどもたちに無料または低料金の食事を提供している草の根的で地域に根ざした取り組みである。こども食堂は子どもの貧困対策が前景化するものの、食事提供の枠を超え、社会的包摂を育み、「居場所」を提供し、世代間のつながりを育む、重要なコミュニティの拠点へと発展している。

本研究では、各国の子ども・若者支援プログラムの比較分析を通じてこども食堂モデルの共通点とユニークな側面を明らかにした。加えて、半構造化インタビューや参与観察の定性的調査をもとに、実践者や支援メンバーの分析を試みた。

こども食堂は、子どもの食の不安に対処し、放課後活動を提供する各国プログラムと共通の目標を共有する一方で、地域主導の取り組み、多世代間の交流、そして「居場所」というコンセプトに重点を置いている点で、これらのプログラムとは一線を画している。また定性的調査からは、ソーシャルイノベーターとしてのこども食堂オーガナイザーの主な特徴として、利他的リーダーシップと「応答」という概念を用いて説明した。

4.【論文】武蔵野大学サステナビリティ研究所紀要

2025年3月『武蔵野大学サステナビリティ研究所紀要』2号、107-118ページ
「ごきげんな地域づくりに向けた人間の「態」についての試論－地域社会における
「コーディネーター」をめぐる展開と今後の展望－」

著者：早川公、大野はな恵、近藤武夫

論文概要：

本稿は、地域社会における「コーディネーター」の役割と位置づけを整理し、「ごきげん」な地域づくりに向けた人材研究の可能性について検討したものである。

コーディネーターは、異なる組織や領域の間に立ち、別々の関心や目的を持つアクターが協働を可能にする役割が期待されている。「コーディネーター」が求められるようになった社会背景を整理すると、行政の限界(NPM)、社会における「協働」の重要性、市民活動の隆盛とNPO法の成立が挙げられる。とくに1990年代には、福祉、教育、地域といった分野で「コーディネーター」の必要性が高まった。ただし福祉や教育分野では制度化が進む一方、まちづくり領域では「協働コーディネーター」のようなプログラムが議論されるものの制度化には至っていない。

本稿では、「コーディネーター」を職能としてだけでなく、特定の現場における人間の「態」として捉えることを提唱している。今後の展望として、リーダーシップ研究との接合、演劇的要素からの研究、質的実証研究の3点を挙げ、近代社会が前提としてきた「個人」を問い直すための人間の「態」としてのコーディネーター研究を目指している。

5. インタビュー調査の質問リスト

<活動(事業)の内容と範囲>

1. 実践している活動(事業)について、具体的に教えてください。
2. どのくらいの範囲のコミュニティ(地域)を対象としていますか？

<活動の背景と動機について>

3. 現在取り組んでいる活動(事業)を始めたきっかけについて教えてください。
4. 活動を始めた・継続している原動力は何ですか？
5. 活動を始めた・継続していく中で影響を受けた人物はいますか？

<子どもの頃の経験について>

6. 学校や地域で、率先して何かを企画したり、人をまとめたりした経験はありますか？
7. 子どもの頃から現在の活動につながるような興味や関心を持っていたことはありますか？

<連携・協力について>

8. 連携している組織・団体(産官学民)、その内容について。
どのような動機・背景で連携・協力関係を築き、その結果どのような成果が得られましたか？
9. 信頼を築くために、特に重視していることは何ですか？
10. 連携がうまくいかなかった事例について教えてください。

<これまでの困難や苦労について>

11. これまでの活動の中で、大変だったこと、苦労したことは何ですか？ どのように乗り越えたのですか？

<組織運営について>

12. チームメンバーの役割分担や意思決定の方法について教えてください。
13. 他のメンバーの意見をどのように取り入れていますか？
14. 他の組織、メンバーなどの間で意見の違いがあった場合、どのように対処していますか？心がけていることを教えてください。

<コミュニティへの影響と未来の展望>

15. あなたの活動(事業)が地域社会に与えた具体的な影響や成功事例を教えてください。
16. 将来的に、どのようなコミュニティを目指していますか？ その目標を達成するためにどのようなステップを踏んでいますか？

<コーディネーターに必要な要素>

17. 優れたコーディネーターに必要な要素や資質は何だと考えますか？

<活動のやりがい>

18. コーディネーターとして活動を続ける上での一番のやりがいや喜びは何ですか？

奥付

< 研究代表者 >

近藤武夫 東京大学先端科学技術研究センター 教授

< 研究実施者 >

早川公 東京大学先端科学技術研究センター 特任准教授

大野はな恵 芸術文化観光専門職大学 准教授

(東京大学先端科学技術研究センター 客員上級研究員)

渡邊陽太 東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員

山角直史 東京大学先端科学技術研究センター 学術専門職員

山内泰 東京大学先端科学技術研究センター 特任研究員

< 寄付元 >

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ

ごきげんな地域づくり人材育成研究プロジェクト 2024年度報告書
発行日 2025年10月31日

編集・発行
東京大学先端科学技術研究センター社会包摂システム分野
ごきげんな地域づくり人材育成研究プロジェクト
〒153-8904 東京都目黒区駒場4丁目6-1
東京大学先端科学技術研究センター社会包摂システム分野
<https://sis.rcast.u-tokyo.ac.jp/gokigen/>



**ごきげんな地域
づくり人材育成
研究プロジェクト**

東京大学先端研社会包摂システム分野寄附講座